



大阪公立大学共同出版会

ニュースレター

No.18

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目次：

- ・ 理事長 新年の挨拶 三田 朝義 …… 1
- ・ リレートーク 1 沼田 英治 …… 1
- ・ リレートーク 2 中井 孝章 …… 2
- ・ 「科学を志す人びとへ」を読んで想うこと 足立 泰二 …… 2
- ・ OMUP会員が「新入生と在校生にすすめる本」2009年版
原稿募集のおしらせ …… 4
- ・ 第18回OMUPサロン報告 …… 4
- ・ 大阪公立大学共同出版会事務局より …… 4
- ・ 編集後記 …… 4

理事長 新年の挨拶



OMUP理事長 三田 朝義

大阪公立大学共同出版会（略称OMUP）会員の皆様、明けましておめでとうございませう。日頃、出版会の活動に対して様々なご支援をいただき感謝いたします。

新たな千年紀のスタートとともに、大阪府下の5公立大学の教職員有志が集まって発足した出版会も、大学の統合に伴い大阪市立大学と大阪府立大学に跨る組織となり、さらには正式名称も特定非営利活動法人大阪公立大学共同出版会として3年目の年を迎えました。

活字文化の危機的状況が続いて久しい。いつの頃だったろうか、梶井基次郎の檸檬にも登場する京都の丸善がつぶれ、量販店のドンキホーテに変わったことは象徴的な出来事だった。ごく最近では、一国の宰相の「未曾有^{みぞゆう}」をはじめとする無教養を露呈したニュース、これもまた活字文化の崩壊への予兆かと思わせるのも私のみだろうか。一方、昨年暮^{みぞう}以来、未曾有の大不況の中であって、唯一うれしいニュースが日本人の方々のノーベル賞受賞であったように思う。その中のお一人、下村脩博士が「金儲けのための論文は知的好奇心に裏打ちされた論文の質に敵う

ことはない」、というようなことを仰っていたのを聞いた記憶があるが、知的好奇心を涵養させるものは活字文化において他にないことを暗示されていたのではないかと。

大学出版会にとって大きな責務の一つは、学生が知を創造する力を育成するために役立つことではないでしょうか。そのために、学生に対してこれまで以上に活字文化の重要性をアピールする必要があるように思えてなりません。本（活字文化＝知的好奇心）を探す喜びも本を読む喜びに勝るとも劣らないものを与えてくれるように思います。そのような中であって、私たちの出版会の果たす役割は、決して小さくはないでしょう。

新年早々、思いつくままに戯言を述べましたが、OMUP活性化するための積極的なご意見を賜りますようお願いして新年の挨拶とさせていただきます。

リレートーク 1



大阪市立大学大学院理学研究科 教授 沼田 英治/動物生理学 (OMUP理事)

若者が活字離れしているといわれて久しい。100年に一度の不景気といわれている中で、出版界は他の業界以上に長期的に低空飛行が続いているようだ。そんな時に、大学出版会の存在意義がかえって大きくなるのかもしれないと

感じている。私事で恐縮だが、日本大学の中嶋康裕さんとともに「動物生理学 環境への適応」を監訳し、一昨年の9月に東京大学出版会から出版した。それぞれの章の翻訳は大阪市立大学の教員と卒業生に分担してもらった。この本は、砂漠の動物などの環境適応の研究で著名なデューク大学のシュミット＝ニールセンさん（2007年に91歳で亡くなった）が書かれたものであり、動物生理学分野では久しく世界標準の教科書とされ、1975年の初版以来、版を重ねて第5版に至っている。このような当該学問分野の定番ともいべき教科書でさえも、翻訳出版を引き受けてくれる出版社はなかなか見つからなかったが、交渉の末、何とか東京大学出版会から刊行することができた。幸い、この翻訳は高く評価され、昨年、日本翻訳出版文化賞を受賞した。受賞したのは訳者ではなく出版社であるが、中嶋さんと私も表

彰式に出席した。その表彰式では、訳者に2件の日本翻訳文化賞、出版社に3件の日本翻訳出版文化賞、さらに日本語から外国語への翻訳1件に特別賞が与えられた。出席者は私たちを除くとすべて文系の方で、ほとんどが年配の方たちであった。そして、対象となったあわせて6件の出版のうち、私たちのものを含む4件が大学出版会による出版で、のこり2件が比較的規模の小さな出版社によるものであった。すなわち、学問的・文化的に価値の高い翻訳は大きな出版社からはほとんど出版することができないのが現状のようである。今後、文化の担い手として、大学出版会の役割はますます重要になっていくだろう。OMUPは、これからの出版界にどのように貢献できるのだろうか、新任の理事として思いを巡らせている。

リレートーク 2



大阪市立大学大学院生活科学研究科
教授 中井 孝章/教育臨床学
(OMUP理事)

私は現在、大学教員として講義やゼミをはじめ、大学の校務に従事していますが、近年、社会の高度情報消費化にともない、大学教員は大学の職務だけをこなしていればよいという時代は終わったことを痛感しています。私も

例外でなく、現在、大阪市役所と大阪府下の大学（大学コンソーシアム）が連携して進めている「子育て支援」のコーディネーターを担当したり、文科省科研費を受けて大学周辺または大阪市内の地区、さらには他府県においてフィールド研究を主体とする多世代交流実践の研究に取り組んだりしています。

こうした実践研究を継続的に行っていると、必然的に研究成果を研究対象の地域やそこで暮らす人々に還元する必要性が出てきます。そうしたとき、OMUPのブックレットが有益になります。従来、本を書くこととは、書齋にこもって一人で孤独に文献を読み、まとめるのが慣例でしたが、いまは、実践現場で得たローカルな情報やデータを具体的な形でまとめあげ、それを地域社会およびその住民、そして民生・主任児童委員などの子ども支援機関に還元していく必要があると思います。そうしたとき、ブックレットは、読みやすさと分量の点で現場と研究を結びつけるうってつけの媒体となります。私は、大阪市の学校給食を変えたい一心で書いた『食育が子どもを救う』に始まり、子どもの住生活のあり方を提言した『子どもを育む住まい方』を経て、2008年は多世代交流実践の状況をまとめた『街づくりと多世代交流』を上梓しました。特に、最後に挙げたブックレットは、「共生ケア・シリーズ」の第1巻にあたるもので、今後、本シリーズは、多世代交流のさまざまフィールドで実践している人たちと議論を交わしながら、共同制作していきたいと考えております。ブックレットには、研究室を超えてまだ面識のない潜在的な他者と出合い、共同制作していくという楽しみがあります。ブックレットは、知と感情の共有媒体なのです。

「科学を志す人びとへ」を読んで想うこと

OMUP常務理事 足立 泰二

最近、ふらっと街なかに出て、とある大型書店で立ち読みならぬ、それもコーヒーの香りを嗅ぎながらの座り読みをすることがある。前々から、「書店は新刊書の図書館であるべきだ」と願っていた者には、最近の大型店舗の各種サービスは嬉しい。いかにインターネットでの購買が広がりつつあろうと、やはり真新しい本を手にとって、書かれている内容を見る前に、まず表紙のデザインを楽しみ、そしておもむろに裏側の定価に目を通す。それから目次と内容を斜め読みする。以前は新しいインクの匂いが読書意欲を掻き立てたものだが、この頃はインク溶媒が変化したのだろう、独特な新刊本の匂いが消えたような気がする。また、一方では、探している本がない場合には書店のコーナー各所にあるコンピュータ検索、時には若くて素敵な店員さんにキーワードを言えば、探し出してくれる。さらに、できることなら緑の葉影の下で読めるようなビオトープでも準備されていたらうれしのだが、と思ったりするのはちょっとわがままに過ぎるのだろうか。

と、言うような次第で先日は店頭で「科学を志す人々へ」を手にした。表紙の副題には赤字で「不正を起ささないために」が目につく。そして科学倫理検討委員会【編】とある。さらに細かく言えば、みどり色の「帯」には白抜き文字で大きく「いま 科学者のモラルが問われている！責任ある研究活動とはなにか | 倫理的な問題にぶつかったときどう判断し行動すればいいのか 日本の研究事情にぴったり合った科学倫理の手引書」と書かれているのだ。ちなみに、日本では当たり前のように見られる、表紙カバーの上にはさらにはちまき状に巻かれている「帯」など、外国では一般書でさえ見られない。ときに書架への出し入れで破損したものも少なくない。帯なぞない方がいいと思うのは筆者だけだろうか。

いささか前置きが長くなった。さて、今日の主題「科学を志す人びとへ」の話題に戻ろう。まず、最初のページを開くと、思いのほか洒落た読み易さ。興味が湧いてきた。しかし、「はじめに」に記載されている、この本の成り立ちをみて、びっくり。何と第20期の日本学術会議での取り決めて設置された「科学者の行動規範に関する検討委員会」の活動成果品がこの本だと言うことで今一度びっくり。日本学術会議は声明を出し、「科学者が社会から信頼されたうえで、主体的かつ自律的に科学研究を進めるための基本的な行動規範」を示したのだそうだ。それがこれなのだ。確かに、次つぎと科学者の不正行為が明るみにでるなど、倫理観や行動規範が問われる問題の多発する昨今、現職から一応は退いた身とは言え、目を覆いたくなる惨状。自身が先導してきた若い科学研究者たちへと思いを馳せながら自戒の念に駆られる。さらに「科学者に対して倫理をきちんと教育する講義や相互チェックするシステムなどがなおざりにされてきた傾向が強い」との主張が述べられている。「科学者とはいかにあるべきか」を一冊の成書にしたものだそうである。

つぎに目次を見ていくと、第Ⅰ部 科学研究をすすめるために、第Ⅱ部 不正を起こさないために 第Ⅲ部 問題が起こる前にと分けられた合計8章は何といわゆるハウ・ツー書である。これが現実の日本の科学およびその教育が直面する問題ではある。余談ではあるが、かく言う筆者もある一時期、このような経済至上主義、効率主義に対して、自然科学に人文科学的視点を取り入れた、多様な展開の必要性を唱えたのだった。しかし、現実の社会においては、ドン・キホーテ的愚論扱いであったような気がする。現実を直視すると、日本学術会議が止むにやまれず、このような本を出版したのも一理あるような気がする。分担執筆には日本学術会議副会長、人文社会系、教育学系、当然ながら理科教育を含む自然科学あるいは科学技術応用倫理系のメンバーが名を連ねている。しかし果たして、これらの名だたるメンバーが昨今の大学ないしは大学院教育現場の実情に精通しているのだろうか。そこまで見てきた私、老「科学を志した人」はメモを取って自宅に戻り、定価の1割引きで買うことのできる大学生協に発注をかけるという行動をとった。何と府大生協にはうず高く積まれているではないか、どうやら教科書で使っている先生がいるようだ。そこまで来ているのか。

さて、また話をもどそう。序論で述べられている「科学研究を担う人たちへ」の呼び掛けは決して科学者を志す人たちへ、ではないことが見て取れる。何と「指導者たちには、しっかりして欲しいものだ。日本の将来を考えれば、責任はとてつもなく重い。これが指導的立場にある研究者の「社会倫理」であり、これもある意味で「研究者の倫理」と言えるだろう」、と結ぶに至っては啞然とするのである。以下は推して知るべし。科学とは何か、科学者の評価と不正、社会における科学の位置、科学者の行動規範、不正を防止するには、科学者の倫理と教育、事例から学ぶ、問題が起こる前に、さらには最終章には、困った時のQ & Aでとどめを刺す、嗚呼。

この本はといった「帯」に書かれているキャッチコピーどおり、科学倫理の手引書ではあっても、いやしくも科学を志す人たちへの前向きなメッセージをイメージするものではあり得ない。場当たり主義の押し売りとしか言いようがない。むしろ、教育に現在携わっている教授陣の再教育、近年言われるところのファカルティ・デベロップメントのテキストあるいは討議資料程度の位置付けにしかなり得ない。少々言いすぎだろうか。

科学が現代社会の中にある以上、社会現象と孤立無援のものでないことは当然である。だからと言ってこのような「ハウ・ツー物」の本が出るような世の中、それも一国の学術会議の下部の「科学倫理委員会編」が得意然と（少なくとも筆者にはそう思える）出版社から発刊されているのである。

ちょっと視点が狂っているのではありますまいか。筆者は定年後も大学初年度学生、とくに高等学校で生物学を履修しなかった工学部学生に一般細胞生物学を教える幸運を持つ。それとともに、幸運にも別の大学の大学院文学研究科で学ぶ機会を持っている。来期はぜひ、知的好奇心を持ってもらえるような講義をするとともに、「科学を志す人びとへ 不正を行いために」をぜひ副読本として組み立ててみたい。素晴らしい科学者が生

まれてくれるように願いつつ。

どぎつい蛍光色で目立ち易くした、PCソフトの解説書に象徴される「ハウ・ツー本」が店頭を賑わせている昨今、「科学を志す人びと」結構受けているのかも知れない。この小文をお読み頂いた方には結果として一読を勧めることになったのかも知れない。「科学を志す人びとへ」科学倫理検討委員会・編（発行・化学同人）¥1800、ISSN978-4-7598-1139-1

原稿募集のおしらせ

「大阪公立大学共同出版会(OMUP) 会員が大阪市立大学と大阪府立大学の新生と在校生にすすめる本」(パンフレット)第9号

数ある「読書のすすめ」はいっこうに学生諸君の文字離れを食い止めるまでに至っていませんが、それでもなお作り続けています、会員間のコミュニケーション、話題になっています。「お書き頂いた先生方の読書傾向が面白い」、中には「自己宣伝の場か」、との手厳しい批評も聞こえてきます。それでも、辛抱強く前向きに、しかも地道に進みましょう。幸い両大学生協の絶大な支援により、搭載本を手にとって読むことのできるブックフェアを秋に実施しています。なお原稿をお寄せいただいた先生には、30部(ご要望で100部程度まで)差し上げ、授業にお使い頂いています。また、7月頃に全推薦書籍を両大学生協書籍部で取り寄せ、学生諸君への購買意欲を図ります。

記

投稿締切日：平成21年3月31日

原稿送付先：編集長 金井一弘 k-star@mtf.biglobe.ne.jp

(念のためCCでOMUPにも送付お願いします。)

なお、投稿書式の詳細はホームページをご覧ください、会員の皆様にはメール、チラシ等でお知らせいたします。

新刊書の紹介



OMUPブックレット No. 14

「南大阪における新しい仕事づくりと地域再生」

中山 徹・橋本 理 編著

「地域再生」の処方箋を描くための調査報告をもとに地域社会にどう組み込むべきかを簡潔にまとめた恰好な手引書。

978-4-901409-46-9 128ページ



OMUPブックレット No. 20

「販売予測の手法と実際」

竹安 数博・武田 弘史 編著

最適な生産計画を迅速に立案することに対応できる販売予測。その手法と実際を説く。

978-4-901409-48-3 94ページ

第18回 OMUPサロン報告

これぞ、まさしく国際交流の成果!!

わが大阪公立大学共同出版会 (OMUP) 発足以来、新刊書の著者をお招きし、刊行のきっかけ、経緯を含め、苦労話、裏話のエピソードを語って戴くと同時に、OMUP会員および著者の友人もお誘いして、ささやかな出版記念のパーティーを開催してきた。今回は数えて18回目、昨年8月に大阪市立大学で取得された博士論文をもとに出版された「孤独な中国の小皇帝 再考」の著者である、中国・ハルビン大学政法学院の鄭 楊准教授が学会のため渡日された機会に合わせ、平成21年1月23日 午後5時から、大阪市立大学学術総合情報センタービル1階の「カフェ ウィステリア」において、開催した。

まず、OMUP総括常務の足立より鄭 楊准教授の略歴を紹介した後、鄭楊さんから、日本に来てからの研究展開の概略が流暢な日本語で話されたあと、OMUPで出版することになったきっかけ、経過が詳述された。学位をとって母国に帰った後、個人的キャリアを積み上げていく上でも勇気を持って書籍出版にチャレンジすることの大切さを知ったということであった。ちょうどその時、日頃指導を戴いていた先生と国際電話しているときにOMUPの存在を知り、ハルビン大学の出版助成を受ける形で実現したとのこと。本の内容、つまりは博士論文で取り上げた内容は、本の副題にもなっているように、中国都市家族の育児環境と社会化をめぐる問題として、中国の人口抑制政策としての一人っ子政策の教育的視点から切り込んだことが語られた。具体的に行ったアンケートデータをもとに、一人っ子制度の是非論ではなく、教育社会学的な面を多面的に浮き彫りにする形で総括するもので、言われるところの孤独な一人ぼっちの子供としての存在との見方にメスを入れた印象を強く受けた。

幸いにも、学位審査と指導に当たられた先生方もご出席いただき、その内のお一人、しかも、著書の巻頭を飾って一文をお寄せいただいた大阪市立大学大学院文学研究科堀内 達夫教授のご発声で、鄭楊さんのOMUPからの出版をお祝いし、労いと今後の励ましの懇親会となった。

今回のサロンは、とくに鄭楊さんの友人たち、その多くは中国からの留学生および学位取得後も日本の大学で研究者として働いている皆さんや、大阪市立大学大学院の博士課程の学生さんの参加があり、若くて活発な話題で終始した。しかも、専門分野が異なっても共通な文字文化に関する、国際交流の話しに花が咲いたのも、大きな特徴だったと言えよう。

昨今の内外における文教・科学を取り巻く環境の中で、地道では



あるが、学術出版が文化あるいは多様な文化交流の礎になるものであることを、改めて認識することになった。OMUPサロン存在を喜び合うことができたのだった。(編集子)

新刊書の紹介



OMUPブックレット No. 21

「関西・大阪・堺における地域言語生活」

西尾 純二 編著

関西や大阪の言葉を中心にことばを社会との関わりで捉える社会言語学のテキストとしておすすめ。

978-4-901409-49-0 94ページ

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学および大阪府立看護大学医療技術短期大学部における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けられないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業など

をおこなっているNPO法人です。参加を希望される方は下記事務局へお問い合わせください。

599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会 (OMUP) 事務局

電話：072-251-6533 ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL：http://www.omup.jp/

入会金：一口一万円 (終身会費)

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

寒波で明けた新年、昨年来の金融危機による不況風はとどまるところを知らぬ様子で身も心も冷え冷えと言ったところ。そのような沈んだ世相の中にも、新年早々の18回を数えるOMUPサロンは久しぶりに盛り上がりました。学位取得直前の若い研究者と中国からの留学生あるいはOB、OGも加わり、とても華やいだ中での出版披露はまさに、国際交流そのものでした。異分野ながら活発な討論がなされOMUPの行く手には明るい光を見出した感じでした。OMUP出版活動が研究のさらなる発展を促していると実感したのでした。(T. A)